

李登輝先生の門下生

辻井

正房

● 常務理事
千里丘タクシー代表取締役



一九七九年六月、当時は台北唯一の空港だった松山機場に降り立ったのが台湾への最初の一歩でした。所属していた地元の青年会議所が創立五周年を記念して、台中県大甲市（現台中市）の國際青年商会と姉妹倶楽部関係を結ぶことになり、締結式に出席するためでした。数えると三十七年も前になります。その後、度々台湾を訪問するようになりました。新幹線（高鐵）もない時代でしたから、台北と大甲をバスで往復するだけの慌ただしい訪台でした。

当時の台湾を振り返ってみると、一九七五年に蔣介石が死亡。七八年には蔣経国が総統に就任し、初訪台の七九年といえは米中国交が樹立され、アメリカが台湾と国交を断絶した年で、十二月には後の台湾情勢に大きな影響を及ぼすことになる美麗島事件が勃発しています。台湾

にとつては大きな節目の年だったといえます。

台湾に対する当時の認識は、「太平洋戦争で負けるまで日本領土」で、その後、「蔣介石の国民政府に返還」され、「四九年の国共戦争で共産党軍に追われた国民政府が首都を台北に移して統治している」といった、今から思えば顔から火が出るような認識でした。四七年に起こった二二八事件や、その後に戒厳令が実施され、スパイ容疑で日本時代の教育を受けた台湾のインテリ層が次々と逮捕され、拷問にかけられて無実の罪で殺されたり投獄された「白色テロ」などについては知る由もありませんでした。

「本省人」「外省人」という言葉は耳にしたことはありましたが、それは元々台湾に住んでいた人と、戦後、国民政府と共に本土から来た人との区別だと説明されていました。大甲JICと

は何度も交流していましたが、政治のことを話題にした記憶はありません。今から思うと、向こうの人達は意識的に政治的話題を避けていたのかもしれない。

司馬遼太郎の『街道を行く―台湾紀行』を読んで、ますます台湾に惹かれていきました。李登輝閣下や「老台北」蔡焜燦先生のこともこの本で詳しく知りました。

私の台湾人生を大きく変えた契機は、二〇一年九月でした。その年の三月十一日に東北地方を襲った東日本大震災に対し、台湾から二百億円を超える義援金が送られました。所属する自衛隊関係団体では、感謝のために台湾を訪問して、馬英九総統へお礼の表敬訪問をし、圓山大飯店で李登輝元総統へお礼を申し上げると同時に記念講演をお聞きする機会を得ました。

すでに日本李登輝友の会に入会していましたが、初めて直接先生のお話を聞き、八十八歳とは思えぬ迫力のある話しぶりと、日本や日本人に対する叱咤激励のお言葉に、涙が溢れて止まりませんでした。

それからの李登輝学校研修団には毎回参加しており、すでに十回を数えます。

二〇一四年六月、清河雅孝先生きよかわまさひこから大阪府支部長を引き継いだ直後に、李登輝先生が九月に大阪で初めて講演されることが決まりました。奇しくも私が李登輝先生来阪歓迎委員会の委員長を務めることになり、八月十二日の東京での記者会見から九月十九日の国際会議場での講演会までの一ヶ月間は、まさに寝る間も惜しんで京阪神を駆け回りました。お蔭で、当日は千七百名に達する多くの皆様に先生の素晴らしい講演を聴いていただくことができました。

これは、蔡明耀・駐大阪弁事処長を始め華僑団体や大阪府・市の議員連盟、台湾との友好団体、自衛隊関連団体、各地のLCとRC等々、そして当日の会場運営を担っていただいた台湾好きのボランティアのみなさんのお蔭でした。

私の残された人生は、自称「李登輝先生門下生」として、微力ながら、日台関係の深い絆を次世代に繋いでいくための活動でお返ししていくことだと考えております。